

第2回東アジア宗教研究フォーラム報告

金子 昭

2月24、25日の両日、第2回東アジア宗教研究フォーラム大会が関西大学千里山キャンパスを会場に開催され、日本、韓国、台湾から宗教研究者や教団関係者など、合わせて65名が参加した（その内訳は日本人37人、韓国人27人、台湾人1人）。同フォーラムは、東アジア宗教文化学会の発展的解消を受けて再編された自由な国際研究グループであり、その準備会及び研究会は2015年1月におやさと研究所の後援により天理大学で開かれた。このとき、大会は隔年ごとに主として日本と韓国で交替で開催することに決められた。2016年2月には、創立記念の第1回大会が韓国・済州島の国立済州大学で開催された。

東アジア宗教研究フォーラムにおける研究発表は、英語のような媒介言語を用いず、東アジア圏の主要言語である日本語、韓国語、中国語で行う。それぞれの国や地域の研究者が母国語で発表できる分、自らの専門的研究の水準を維持した研究発表が可能となるが、その一方で正確で専門的な翻訳や通訳が欠かせない。今回も日韓、日中の翻訳や通訳について、研究者や留学生が重要な役割を果たしてくれた。お互いに意思疎通が難しい中でも、研究交流を行おうという意志と努力の下に初めて成立するのが、このフォーラムの特徴であり存在意義でもある。

今回の大会テーマは「戦争と宗教研究」。最初に日韓の研究者から基調講演が行われた。まず西村明・東京大学准教授が「いま、東アジアで宗教と戦争を考えるということ」と題して講演。戦前の『宗教研究』（日本宗教学会研究誌）に見る宗教研究者の戦争に関する言説について、当時の日本の宗教界の状況と関連させて紹介し、論評を行った。次いで申光澈・韓神大学教授が「韓国戦争が韓国宗教の地形とアイデンティティに及ぼした影響」と題して講演。韓国戦争（韓国における朝鮮戦争の呼称）は500万人と言われる犠牲者をもたらしたが、その過酷な状況の中で宗教人口が急激に増加したこと、また人々の救いに対してキリスト教や仏教などの世界宗教と韓国固有の民俗宗教とが果たした役割について概観した。



① 基調講演会場での集合写真

その後、分科会に移り、日韓部会では16本、日中韓部会では6本の計22本の発表が行われた。私は日中韓部会で「大正期の天理教における時局対応と教理解釈—とくに第一次世界大戦に関する『道乃友』の言説をめぐって—」という発表を行ったほか、韓国側発表者の司会やコメンテータを担当した。この日中韓部会では、今回唯一の中国語圏から参加した黄約伯・台湾中央研究院助研究員も発表した。黄氏は天理教の海外伝道で



② 懇親会場にてなごやかに歓談

テーマとしてイギリスで博士論文を書いた文化人類学者であるが、今回の発表は真言宗高野山派が台湾の花蓮近郊に置いた吉野布教所（現：慶修院）の現状を例に、宗教の現地化・土着化について論じる内容だった。

大会テーマ「戦争と宗教研究」に関わる研究発表は、「韓国古代史の戦争と呪術」（金星順）、「戦時体制期植民地挑戦の紙芝居」（李大和）、「日蓮聖人銅像と『戦争』」（高瀬航平）、「戦時教学の歴史社会学」（宮部孝峻）、「大正期の天理教における時局対応と天理教」（金子昭）、「加藤完治と神ながらの道」（西田彰一）、「戦死者記念館における死者の想像」（清水亮）、「戦場と祭場—朝鮮後期の別窟祭設行を中心に」（金ユリ）、「黄巾の乱と韓・日鬼道の起源」（金榮徳）、「16世紀末文禄・慶長の役（壬辰倭乱）の朝鮮帰化武将」（朴京夏）の10本と、全体の発表の半数近くを占めた。



③ 近つ飛鳥博物館にて黄約伯氏と

日本の新宗教関係の発表は、天理教についてのものが1本、立正佼成会及び教団付置研究所懇話会による宗教間対話に関するものが1本、日韓の創価学会に関わるものが4本であった。前2者が研究者とはいえ当該教団関係者による発表であったのに対して、創価学会に関わる発表はいずれも教団外の研究者によるものであった。社会的インパクトのある教団宗教であれば、それだけ研究者の注目も集めるのではないかとも思った。

2日目の午後はエクスカッションとして、参加者とともにバスで百舌鳥・古市古墳群を巡り、その後で「近つ飛鳥博物館」を見学した。今回とくにこのコースが選ばれたのは、古代日本において朝鮮半島との交流がいかに盛んであったかについて、古墳遺跡やその出土物を間近に見て実感してもらうためであった。参加者はみな古代の日朝交流に思いを馳せながら半日の見学旅行を楽しんだ。



④ 近つ飛鳥博物館ホール内の展示